

宮沢賢治のフィールド教育の現代的意味

田 中 俊 明

要 旨

地質学のフィールドワーカーとして科学的に自然を捉える技法と心象スケッチの表現者として感覚的に自然を捉える技法を併せもつ宮沢賢治が、花巻農学校で教師をしていた時代におこなったフィールドでの教育実践のようすを、教え子や知人の証言によるフィールドでのエピソードをもとに辿り、宮沢賢治のフィールド教育の現代的意味について考察した。

キーワード

宮沢賢治, フィールド, 自然, 環境, 教育

1.1 フィールドワーカーとしての賢治

賢治 10 歳、鉱物を採集し昆虫の標本をつくる。13 歳、盛岡中学校入学。野山をあるいて鉱物標本や植物の採集に熱中。15 歳、しばしば岩手山に一人で登山。19 歳、盛岡高等農林学校に入学し、専門的に地質学や土壌学などを学ぶ。20 歳、同級生 11 名とともに盛岡付近の踏査を行い「盛岡付近地質図」（五万分ノ一）を作成。21 歳、岩手県江刺郡の地質を調査。22 歳、卒業論文「腐植中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を提出し、盛岡高等農林学校を卒業。同校研究生となり、地質、土壌、肥料を研究。岩手県稗貫郡の土性調査。24 歳、盛岡高等農林学校地質学研究科を修了。早池峰山麓、大迫、小山田付近の地質調査。25 歳、稗貫農学校（後に花巻農学校）教諭となる。27 歳、花巻町小舟渡、北上河岸の第三紀泥岩層から偶蹄類の足跡や胡桃の化石を発掘し、そこを「イギリス海岸」と称す。以上、宮沢清六編の賢治の年譜（宮沢、1995）からフィールドワークに関する部分を抜き出してみた。“石ッコ賢コ”とあだ名がつくくらいの石好きの少年時代にはじまり、まさに地質学徒として石と土をめぐる多数の本格的なフィールドワークをおこなってきたことがうかがえる。地質学者の宮城一男（1980）は、賢治が休みの度に友人を誘っては山野を跋渉し岩石や植物の採集をしていたという盛岡高農時代の友人たちによるエピソードに触れて、賢治は本当に心からフィールドワークを楽しんだ人であり、自ら「好きで好きでたまらず」にフィールドに向かう地質学徒としての恵まれた感覚と資質の持ち主であったと述べている。また賢治は、高農二年（現代でいえば大学三年生前後）の時に以下のようなフィールドワークの重要性と夢について記述している（宮城、1980）。

閑散なるの日一錠を携えて山野に散策を試みんか目に自然美を感受し心身爽快なるを覚ゆるの

みならず造化の秘密を看破するを得、一礫一岩塊と雖も深々たる意味を有するを了解し、尽き難きの興味を感ずるは、生等の親しく経験したる所とす、加之冬夏の休業に際し地質図を手にして長期の跋涉を試みんか至る所目前に友ありて自然の妙機を語り旅憂を一掃せしむるのみならず、進んで宇宙の真理を探究せんとするの勇氣をして勃々たらしむ。

フィールドワーカーの中には、フィールドが好きでフィールドに出かけていく人と、フィールドが好きというよりもどちらかという学問の必要に迫られてしかたなしにフィールドに出かけていくタイプの人がある。この文章からも賢治が前者であり、フィールドワーカーとして適性をもった人であったことがうかがえる。また、賢治は、そのフィールドワークの中で、調査を行うのみならず、創作活動も行っている（宮城，1980）。賢治は、地質学のフィールドワーカーとして科学的に自然を捉える技法をもつだけでなく、フィールドにおいて自然と交感する中から湧きあがるさまざまな心象をスケッチして表現するという、感覚的に自然を捉える技法をも併せもっていた。このために、生き生きとしたリアリティをもった自然描写を背景に、独特のイメージーション溢れるファンタジックな詩や童話の数々を生み出すことができたのであろう。そして、後述するフィールドでの実体験をともなった環境教育においては、教育者が学習者に、科学的に自然を捉える技法を伝えることはもちろん重要であるが、それだけではなく、心からフィールドを楽しむ「目に自然美を感受し心身爽快なるを覚ゆる」感性、学習者に感覚的に自然を捉える技法を伝える姿勢が何よりも大切なのである。

1.2 賢治のフィールド教育

賢治は、25歳（1921年）から29歳（1926年）までの間、花巻農学校で教師をしていた。その間、独特の個性あふれる教育をしたことが教え子の証言からうかがい知ることができる（佐藤，1986；佐藤，1992；畑山，1992；鳥山，1996）。農業実習、地質土性演習、イギリス海岸での化石の発掘などフィールドでの教育も多数行っている。また、課外でも生徒とともに頻りに岩手山などのフィールドに出かけている。フィールドでの教育は、後で詳述するように、科学的でなおかつ感覚的な多種多様な経験を通してフィールドそのものを全体的・多面的に理解するような複合的な学びをもたらす体験が重要であると思う。こうした観点から、教え子や知人の証言による賢治のフィールドでのエピソードを辿り、賢治がどのようなフィールド教育を行なったのかを見てみよう。

1.2.1 型にはまらない学びの雰囲気

麦刈って、脱穀。脱穀は、籾殻が飛んで首に刺さって、汗でべとついて、ほんとに嫌なんですよね。すると賢治先生は、とつぜん大声で「おおい、氷買ってこい」なんて言うのです。

代表がバケツ持って買いに走ります。ブドー液を先生は持ってくるんですね。で、それをぶちこんで、みんなで麦藁で作った長いストローで、たったままちゅうちゅう吸って騒ぐんですよ。

そしてふっと上向いて山が見えれば、「あのごつごつした肩のあたりね。あのあたりまで昔は海だったんだな」なんて、とつぜん、先生言うんですよ。

おかげで、今でも道ばたで岩を見ても、どんな小さな石ころ見ても、その故事来歴が分かってしまう。

長坂俊雄（畑山，1992）

農学校の授業は午前中で午後はたいてい実習になります。宮沢先生の実習には何となくひかれます。毎日班をつくってやるのですが、宮沢先生にあたった班は、みんな大喜びです。なんとなく嬉しいんです。先生の実習受け持ちは水田です。作業が始まって、みんな田に入って、しばらくしますと、先生は、全部田から上がれとって、田の畔に腰をおろさせます。畔がじめじめしていても一向に苦ししません。

先生はとみれば、草の上にひっくりかえったり、空に手を伸ばしてわぁと叫んでみたり、パントマイムのような、劇のみぶりのようなダンスのようなものだったんでしょう。私たちは、それを見るのが面白くてしかたがなかったのです。

晴山亮一（佐藤，1992）

草鞋ばきに雨具、防寒具、提灯、それに三食分の握り飯持参で花巻を出発した。夕方岩手山登山口入り口の民家で一休みした。そのとき宮沢先生はそこのおばあさんにテンプラを頼み、私たちは先生に持参したおにぎりを差しあげた。先生は「俺は母に下宿代を払っていないから待遇が悪くて……」などと冗談をいいながら、みんなで一緒に楽しく夕食をすませた。登り始めてから六合目あたりでまた一休みした。先生はそのとき空を見上げながら星座の説明をされた。空は底ぬけに澄んでいてよく晴れ、満月だった。翌日は山をおりた。

「下山は辛いんだ。膝の関節に力が真面にかかるから途中で足がくたくたに疲れる。このような足運びをするとよい」といって先生は飛びおりてみせてくれた。足に体重があまりかからないようにぴょんぴょん跳ぶように体を移動させた。三合目あたりまで下山したとき「折角ここまで来たから素ばらしい火山の奇跡を見ることにしよう」といって岩手山の東側中腹から流出した「焼け走り熔岩」に連れられて行った。

照井謹二郎（佐藤，1992）

賢治のフィールド教育は、予定された学習プログラムを形式的にこなすというようなやり方ではなかったようだ。その時々でのフィールドでの自然や教え子の状況をみながら、即興的な教育を行っていたようだ。こうした型にはまらない学びの雰囲気は、明るく楽しい遊び心に溢れたものとなる。そして、教え子に「勉強は遊戯のように興味深く、実習はまた大地のにおいと賢治の話でむせかえるような楽しさに溢れていた。そこにはおたがい人間どうしの営みがあったのである。」というようなことを語らせてしまうのである（佐藤，1992）。しかし、台川での地質巡検のようすを作品にした「台川」（宮沢，1986）の本文にみられるように、教え子に楽しく地質学

を学んでもらうためにはどうしたらよいか、内心はいろいろ気を使って、反省したり、工夫したりしていた跡が見て取れる。

明るく楽しく型にはまらない学びの雰囲気をよく伝えているのはイギリス海岸での授業であろう。イギリス海岸でのエピソードを以下にまとめてみる。

1.2.2 イギリス海岸での授業

当時先生は、第三紀層の泥岩の化石であるから、少なくとも二百万年から六千万年以上前のものであるというような話をされました。あるいは二百万年から四百万年前だといったようにも聞いています。当時この附近に大きなクルミの木があって、その下に水牛のような偶蹄類の動物がたくさん住んでおったんだなあと想像して、私ら少年の心は夢に踊って非常に楽しかった気がしております。

長坂俊雄（佐藤，1986）

ある夏のことでしたが、生徒みんなでイギリス海岸で水泳のあと岩の上で甲らぼしをしておりました。誰がいうともなく「人は何故生まれてきたのか」ということになりました。それぞれ、人は食うために生まれてきたのだとか、いや働くために生まれてきたのだとか、諍々の議論となりました。「先生はどう思われますか」ということになりました。それに対する先生の言葉は「人は何故生まれてきたのかということを知るために生まれてきたのだ」という答えでした。

長坂俊雄（佐藤，1992）

夏休み中の「夏季特別実習」のときのことである。宮沢先生が二重ガッパを着て職員室から出てきた。暑い夏なのに不思議な格好に驚いて先生の顔を見つめたら、先生は前をひょいとあけて見せた。なんとそれは素裸に禪姿であったではないか……。私たちは実習で汗をしばったあと先生と一緒にイギリス海岸で水泳をしたのだった。

沢田忠雄（佐藤，1992）

イギリス海岸で泳いでいるとき、賢治が生徒たちに「向こう岸のスイカ畑から、何個か失敬しよう」と提案した。生徒が実行すると、持ち主が怒って追いかけてきた。ところが、賢治はちゃんと前の日、事情を打ち明けて、代金を払っていたのだ。農学校のスイカも、毎年一〇〇個のうち二〇個ぐらいは、中ががらんどうだった。賢治がササ竹のストローであらかた中身を吸ってしまっていたのだ。賢治は「こうやって食うのがいちばんうまい」とうそぶいていた……。

松田浩一（佐藤，1992）

賢治の作品である「イギリス海岸」（宮沢，1986）にも、賢治のフィールド教育のようすが目に浮かぶようにありありと表現されている。畑山（1992）は「イギリス海岸」の本文を引用して、「実習とも遊びともつかないこのイギリス海岸での詩のような時間のすごし方は、そのまま

賢治の授業精神の象徴でもあった。」と述べている。賢治の授業には、いわゆる現代の学校教育のような学習や指導をして知識を習得させるといった型にはまった流れではなく、型にはまらない学びの雰囲気の中で人間同士の営みの経験から自然な形で知識が習得されていくというような流れがあったように思われる。教え子が、そのフィールドに触れることを喜び、好奇心を抱き、フィールドの自然について想像力を働かせて自由に考えることは、教え子がフィールドの自然についての概念やイメージを固定したものして捉えてしまうことを防ぎ、柔軟で多面的な理解を促すと思われる。

1.2.3 素直に自然を感じる姿

二年生の秋、十月の小春だったが、先生と二人で、小さな舟で北上川を渡ったことがあった。その途中、先生のポケットからリングがポチャンと落ちた。先生は、それが水に沈んでゆくさまがきれいだといって、何度もポチャンを繰り返す。ああ、きれいだといって繰り返す。そのあげく泳がないかといひ、自分一人で泳ぎ出す。さすがに私は冷たくて泳げなかったが、先生はそういう感覚の持ち主だった。

照井謹二郎（佐藤，1992）

空に、白い雲がただ流れていくのを見て、先生は、ここから喜ばれるのです。雲に声をかけられるのです。「おい」と。……「いいなあ、根子君」。……損得勘定のまったくない先生なんです。白い雲が流れていく……もうこれ以上のものはないのです。これで十分なのです。

根子吉盛（鳥山，1996）

以上のエピソードが示しているように、自然との関わりあいのとらわれのない自由さに、賢治のフィールド教育の大きな特色がある。賢治は特に教えようと思って教えているわけではないようだが、賢治が自然の美しさにただ素直に感動し行動するその姿が、そのまま教え子の心に焼きつき、伝わってゆく最大の教育となっているようだ。筆者もフィールドワーカーのはしくれであり、賢治と同じように、ふと野山を歩いていて見上げた空、尾根を登り終えて吹いて来る風、海に浮かんで潮の流れに身を任せているときの波音、岩から川の淵に飛び込んだ水の冷たさ、山上での満天の星明かり、雪の上で身体にふりそそぐ柔らかで暖かな日光など、もうこれ以上のものはない、永遠で十分とを感じるような数え切れないほどの自然の経験をしてきた。そうした経験の積み重ねがフィールドを愛することにつながる。この自然を感じる技法を教え子にどう伝えればよいか。まさに素直にありのまま感動して行動するその姿を教え子に見せればよいのだと賢治の教え子が語るエピソードは教えてくれる。

1.2.4 自然との交感

あるとき、先生が夜一人で散歩しているので、「先生、何をしていますか」と聞きますと、「いまそのそば畑で泳いできた。白い花が咲いていてとてもきれいだった。気持ちよかった」

というんです。そば畑を海や川と考えるとそこで泳いだんですね。

平来作（佐藤，1992）

ある秋の遠足のことでした。野原の松の間を歩いていた時です。賢治さんは突然向こうの大きな松の木の側までかけてスルスルとその木に登ったのです。木に登ることは実に上手です。そして遙か西の方を指して、「ホウ、ホウ、ホウ」と呼んでいます。何かとみれば名の知れぬ鳥、多分尾長だったでしょう。

二十羽ほど美しい編隊を作り、鱗雲の下を陽の光にあたって、キラキラ光りながら飛んで行くのでした。樹上の賢治さんは無性に喜んでいる。それからスラスラと木を降りて、喜びの溢れるままに手をうち、足をピンピン躍らせながらぐるぐるとび回りました。

佐藤隆房（佐藤，1992）

ほうっ、ほうっというのはね、賢治先生の専売特許の感嘆詞でしたよ。どこでもかまわず、とつぜん声を出して、飛び上がるんです。

くるくる回りながら、足ばたばたさせて、はねまわりながら叫ぶんです。

喜びが湧いてくると、細胞がどうしようもなくなるのですね。身体がまるで軽くなって、もうすぐ飛んでいっちまいそうになるのですね。

瀬川哲男（畑山，1992）

賢治はフィールドで自然を感じたとき、その心そのまま素直に身体で行動するという特性を持っていたようだ。それは自然と交感する人間の一つの姿である。この行動は、はたから見れば奇異に思われるかもしれない。しかし、自然と交感して声を上げ跳ね回るといのは、チンパンジーが激しい雨に反応して大地を蹴って跳ね回りレイングスを踊るのにも似た、人間の心を開放し原始的な感覚を呼び覚ます行動といえよう。フィールドの自然の中に身を置いているときは、この自然に対して心を開く感覚を持つか持たないかで、大きく経験の質が変わってくるように思う。

その夜はどこで泊ったのか覚えていない。その翌日だったに違いない。みんなで歩いて農学校へ帰った。その途中、志戸平温泉のちょっと手前のあたりに、広大なススキの平原があった。今の労災病院のあたりだったか。そこへさしかかった時、先生が、よし花輪を作ろうと言う。私にはピンと来ない。作り方も皆目わからない。ところが、先生が作ったのはススキの花輪だった。ススキを束ねて直径七十～八十センチの輪にし、つる草をまいてそこにキョウとかオミナエシといった野の花をさす。文字通り花輪だった。先生はそれを首にかけてホーホーホーと踊りながらススキの中へ入って行った。私たちも続いた。みんな花輪を首にかけてホーホーホー、手をあげ、ススキをかきわけてホーホーホー、ホーホーホー。秋の午後、こうやって踊りながら学校へ帰ってきた。

柳原昌悦（佐藤，1992）

賢治がフィールドで自然と交感し心を開く感覚が教え子たちに伝染してゆくようすが、このエピソードからうかがえる。こうした賢治の自然と交感する姿は、教え子たちの心に強烈なインパクトを与えたことが想像される。さらに賢治は、この自然と交感する姿に加えて、受けた心象をスケッチする創作の瞬間までも教え子の前にさらけだしている。

左手をポケットにこう入れてね、畔道を歩くんですよ。賢治先生は。

首にペンシルぶら下げてね、菜っ葉服。それで実習の列の先頭に立って、猫背にこうして歩くんですよ。麦藁帽子で、歯出してね。

それは、とつぜん天から電波でも入ったように、さっさささっと、生徒取り残して、前の方に駆けてゆくのですよ。

そうして、跳び上がって、「ほ、ほうっ」と叫ぶんですよ。

叫んで身体をこまのように空中回転させて、すばやくポケットから手帳を出して、何かものすごいスピードで書くのですよ。あれみんな「春と修羅」なんですね。

長坂俊雄（畑山，1992）

先生はゴムの短靴につば広の経木の帽子、ひじの抜けた背広。同行者は小原久夫（昭・三卒）、朝倉六郎（昭・二卒）の全部で四人、宮野目あたりから日も暮れかけて、街道はときおり馬をひいた人が通る。月が出て、風が音を立てると先生はゴム靴を踏みならしながら、しきりにホホホと叫び先頭を切る。その様子ときたら欣喜雀躍、あたりの風景の中に全身がすっぽりと埋没しきっている。

歩き疲れて道ばたの枯草の上に一行四人腰をおろして休憩する。その時が先生の創作の時。月がぼんやりしていたので先生は手帳にうまく書き込めたのかなと隣にいて思う。終夜歩きどおしで日詰から翌朝の一番の汽車で花巻へ帰ったのであった。

先生は夜、家を出て盛岡まで歩き一睡もせず翌朝帰り、そのまま授業に出る。たびたびそんなことをされた。くたくたに疲れたときはどい詩がかけるといった。最もよく詩を書かれたのは夜半のようであった。うれしいときはアカシアの花の下、クローバの花咲く野で踊り、秋は白い萱穂の中に飛び込み、稲田の向こうから月が出るのを見るとホホホと喜びの声をあげる。天地自然が先生の演舞場と化す。悲しいときには、ろくろくものも食べずに青ざめている。修羅の顔とでもいうのであろうか。

菊井清人（佐藤，1992）

自然環境教育や自然学習におけるフィールド教育においては、学習者に感覚的に自然を捉える技法を伝えることが大切であると上述したが、こうした技法はどちらかというと暗黙知の領域に属する部分が多いように思われる。それを伝えるためには、職人がその伝統技能を弟子に身をもって示して伝えるのと類似している。斎藤孝（1997）は「一見子どもの存在を忘れていよう

でも、芸術の創造の瞬間自体を子どもに見せるというのは、おそらく最高の教育方法である。」と述べている。賢治のフィールドにおける動物や植物、風や雲や光、日月星辰など自然の森羅万象との交感の経験は、心象スケッチとして記録され詩や童話が紡ぎだされただけでなく、それを目の当たりにした教え子の心に伝染していったのだ。感覚的に自然を捉える技法を学習者に伝えるには、教育者自らが身をもって示すことが大切と考えられる。

1.2.5 困難や不便を楽しむ

賢治は盛岡中学二年生のときにはじめて岩手山に登って以来、数え切れないほどの岩手山登山を繰り返した。賢治にとって岩手山は、地質学や植物採集のフィールドであり、また山の霊に会いにゆく敬虔な読経の山であり山王であった（宮城，1980；佐藤，1992）。教師時代にも、教え子を連れてよく岩手山に登った。その時のエピソードを、以下に引用する。

最初の登山のときなど途中でひどい雨にあいました。宮沢さんは、これ以上登れない、ダメだとい、それまで登るか、やめるかごうごう議論していた生徒たちを、下山させました。ズブ濡れでしたので、駅前魚のカンヅメをたくさん買って、それを入れておかゆを煮てもらい、フウフウって食べたときは生き返った思いでした。

堀籠文之進（佐藤，1992）

それは、二年生の実習としての登山だったと思います。希望者をつのって、岩手山へ行くことになったのです。で、家の親父は、腹が空くと大変だからということで、おにぎりをごそっと作って、網袋に入れ、背負わせてくれたのですよ。他に賢治先生は、全員に、各自油紙か新聞紙を四、五枚持ってくるようにと言っていました。初め意味が分からなかったのだけれど、山の上で寒くてどうしようもなくなったとき、それを身体に巻いたのです。見事にそれが役立ったのですよ。出発したのは土曜日の午後でした。花巻駅から汽車に乗って行って、滝沢駅で下りたのです。そうしてそこから歩きはじめました。途中で日が暮れて、月が出てきました。満月みたいなまんまるい月です。賢治先生は、そのときも、「ほほうい、ほほうい」と叫びながら、大きく手を開いたり閉じたりして飛びまわりました。滝沢の神社について一休み。「さあ、これからが大変だぞ」と先生は言いました。三合目で、また小休止しました。そこで弁当も食べたのです。五合目を越えたあたりでしょうか、「ここは難所だぞ。がんばれ」と、先生が皆を励ましました。そうして自分しんがりに登ってくるのです。下から励まし声が上がってくるのです。一人の落ちこぼれもなく、全員が頂上に到着しました。ご来光を拝むにはまだ大分間のある時間でした。誰かがたきぎを集めてきて、焚火がはじまりました。それでも寒くて身体がふるえてくるのです。で、そのときみんな、新聞紙を身体に巻きつけたのです。そうするとシャツを着足したようにあたたかくなったのです。ご来光は見えたのか、見えなかつたのか忘れられました。とにかく夜が明けて、お鉢回りをすることになったのです。風が強く、周囲を雲海が囲んでいました。そしてその上はるかかなたに、早池峰山と、岩木山、鳥海山が見えました。そのお鉢回りの途中でも、賢治

先生は、何度も立ちどまって、手帳にいろいろ書いていました。お鉢回りが終わったところで、全員で持っている食べものを全部出して、食事にしました。山のように背負っていったわたしのおにぎりも、あつという間に皆に食われました。そうして、最後に一つ残ったおにぎりを、先生とわたしは、二つに分けて食べたのです。雨が降り出しそうな雲行きになってきたので、予定を早めて下山することになりました。六合目あたりで、ちょっと降られたのだったかなと思います。先生は、「根子くん、きみは丈夫だから一番最後に二人で下りよう」と言い、そうしました。三合目あたりに水の湧くところがあって、皆そこで顔を見合わせて笑いながら、腹いっぱい水を飲みました。それでもだんだん腹が空いてきました。それで滝沢駅まで行く途中にうまい具合に豆腐屋があったものだから、そこで一丁ずつ皿にのせてもらって、しょうゆをかけて食べました。

根子吉盛（畑山，1992）

以上のように、賢治の生徒を連れての岩手山登山には、ままたらない山の自然を相手に教え子たちの中に人間らしく生きる感覚が磨かれてゆく経験に充ち溢れている。腹が本当に減っているときに食べるからこそ食べたものがすぐに身体の栄養になってゆくのを感じられるし、より美味しく感じられる。不便な状況だからこそ知恵をしぼって工夫して生きる喜びや楽しみを学ぶ。困難な状況だからこそ人間同士が協力し分かちあう力を感じるし、乗り越えたときの喜びや楽しみを感じる。そうした経験の積み重ねを通して、ヒトとしての身体性、生きる困難のものともしいたくましい感覚、不便を楽しみ工夫する知恵や創造力、協力しあう社会性などが育ち、死に至るような大きな困難や深刻な危機を切り抜ける力が身につき、ひとりの人間として生きているという自信が湧いてくるのだと思う。生きる力を育てるための体験的な教育が現代の日本において望まれているが、現実の教育現場では、過剰に安全管理され不便を排除し便利で快適に整えられた人工的な環境の中でその力を育てようとしているようにみえてならない。しかしながら、そのような生きる力が身につくのに必要な原因が取り除かれた環境で生きる力が育つはずもないのは明白であると思う。便利で快適な教育的環境をあたり前とする現代の人々は、不便や困難の体験こそが人間らしさを育ててきたという人間の歴史を改めて自覚する必要があると思う。賢治の岩手山登山のように（当時は物質的に本当に貧しかったので意図的にしたのではないと思うが）、現代においては、あえて不便のなかで知恵をしぼって工夫することを楽しんだり、あえて少々の困難や危険に立ち向かい乗り越える経験を積むような教育的環境を意図的に整えることこそ、本当の意味で生きる力を育てるために必要なことなのではないだろうか。そのためには、教育者や保護者の意識が変わる必要があるが。

1.3 賢治の実践したフィールド教育で賢治のような教育者を育成すること

ITをはじめ諸科学技術の進展などにともない、地球的規模でのグローバル化が急速な勢いで進行し、地球人口が急増し地球環境の破壊崩壊の危機が深刻化する中、従来のような教室で行われる座学の環境教育のみでは学習者にとって直感性・具体性を欠いた観念的・抽象的な知識の習

得のみになってしまうことが指摘され、フィールドに出かけ実体験をともなった環境教育を行うことの重要性が国を挙げて叫ばれている。しかしながら、フィールドでの自然体験や環境学習は、型にはまったプログラムを実行すればそれでよいというものではない。自然に興味がないもしくは未熟な自然体験しか持たない教育者が、形式化された自然の体験を学習者に与えるだけでは不十分なのである。型にはまったプログラムでは、それなりの体験の効果しか生みださないからである。フィールドでの教育は、その地域のフィールドにある自然の事物が学びの対象になるばかりでなく、フィールドがもたらす感動や驚きもしくは自然との交感など感覚的・情緒的な興奮、フィールドで行動することによる経験など、科学的でなおかつ感覚的な多種多様な経験を通してフィールドそのものを全体的・多面的に理解してこそ、自分の住む地域ひいては地球というフィールドへの愛（環境の保護・保全の意識や態度）が芽生えると経験的に考えるからである。このような教育を実現するためには、急がば回れで、自分の住む地域のフィールドでしっかりと地に足のついた教育を実践できる賢治のような教育者をできる限りたくさん地道に育成することが重要であると考え。そして、賢治のような教育者を育成するためにまずは手始めに、教育者を志望する大学生に対して、賢治が実践したような、予定された学習プログラムのみを行う直線的・効率的な授業でなく、また定型的・画一的な体験のみに終始しないという意味で、いわばスローなフィールド教育を4年間じっくりと実践することである。そのための人材として、フィールドの自然が好きでたまらず研究を続けつつも、すぐに利益を生みださない基礎的な専門性ゆえなかなか定職を得られないで苦労している、自然体験豊富で感性も豊か、なおかつ気のいいポスドク・フィールドワーカーたちに、大学でのスローなフィールド教育の実践者としてのポストを大量に用意することも必要であると思う。さらにつけ加えれば、賢治の実践したスローなフィールド教育および本論文では言及できなかったが賢治の詩や童話などの作品のなかに息づく人と自然の共生にまつわる環境思想や自然に対する美的感性は、教育者を志望する大学生を対象とするのみでなく、持続可能な地球環境の構築を目指す上でこの先避けられないであろうライフスタイルの方向転換の一つの在り方として、全ての人々の学びに対して現代的意味を持つと考える。

文献

- 宮城一男 1980『宮沢賢治の生涯 石と土への夢』筑摩書房
 佐藤 成 1986『宮沢賢治の五十二箇月 一教師としての賢治像一』川嶋印刷株式会社
 宮沢賢治 1986『宮沢賢治全集 6』ちくま文庫
 佐藤 成 1992『証言 宮沢賢治先生 イーハトープ農学校の1580日』農文協
 畑山 博 1992『教師 宮沢賢治の仕事』小学館ライブラリー
 宮沢賢治 1995『宮沢賢治全集 10』ちくま文庫
 鳥山敏子 1996『賢治の学校 宇宙のこころを感じて生きる』サンマーク出版
 斎藤 孝 1997『宮沢賢治という身体 生のスタイル論へ』世織書房